「行書扇面文彭論印一則」

河野隆（鷹之）
Takashi（Yoshi）Kawano

文彭（三橋、一四九七～一五七三）は文徵明の子で、石印材に印を刻す道を開拓したとして、師友の関係にあった何震（雪漁、生没年不詳）とともに〈文何〉と並称され、近代篆刻の開祖として尊崇されている。篆刻が芸苑において書画に比肩する一ジャンルとして認められるようになる契機となった初期の活動が高く評価されているのである。

文彭の言として清の陳鍊の『印説』に朱白文を刻る時の要諦が伝えられている。朱文印は伸びのびとして淀みなく、白文印はじっくり落ちついていることを求めるもので、それぞれ「春花舞風」、「寒山積雪」の如くにせよと分かりやすい比喩を用いている。さらに、落手は大胆に、収拾は小心にせよと続き、「壮士舞剣」、「美女拈鍼」の如く運刀することを説いている。

その論印の前半の一段を行書で扇面に試みたのが本作である。全二十四字を上下二段に十二行でまとめてみた。行書は日常性の強い書体なので、最もその人の地金が出る。書の素養が端的に表れるので恐ろしい一面がある。これを書すに当たって、特別に誰々に仿うという意識はなく、今の自分の身についてものをそのまま出したといった対応である。米芾の行草は好きでよく習うし、王鐸・傅山も自分なりに臨書しては楽しんでいる。また、清朝金石家の字にも関心を持ち、特に胡震の細字の跋文や、画家の楊伯潤のほのぼのとしたこなれた味わいの字にも心ひかれるところがある。それらの嗜好がないまぜになって表現したもので、平常心の試作小品と言うべきものである。

用紙はうすい藤色の染め紙だが加工紙ではないので潤渇は自然に現れる。その墨量の変化を引き出しながら、線のやわらかさや含みを留めるよう運筆した。結構は懐が狭くならぬよう心掛け、横へのゆったり感を失わないように配慮した。

四十代までの自分の行書の構えや表情を、かつて製作した篆刻作

品の題字や落款の小字などで時折目にすることがあるが、昔はこんな字を書いていたのだと、今との違いに驚くことがある。特に構えてこうなったわけではないが、やはり求めるものの影響か自然にこのような書風になったようだ。冷静に理知的に構築する篆・隷・楷とは異なり、行書の日常性はありのままの自分がそのまま出て来る点で油断がならないとつくづく思うのである。帖学系の伸びやかさと、碑学・金石系の力強さと陰翳をミックスしたような風格が理想なのだが、リキまずに筆を把って、見飽きぬ奥行きと味わいを堪えるのは大分先のことなのだろう。

・題名

文彭論印一則

・用具・用材

筆…玉川堂製「潮風」八号

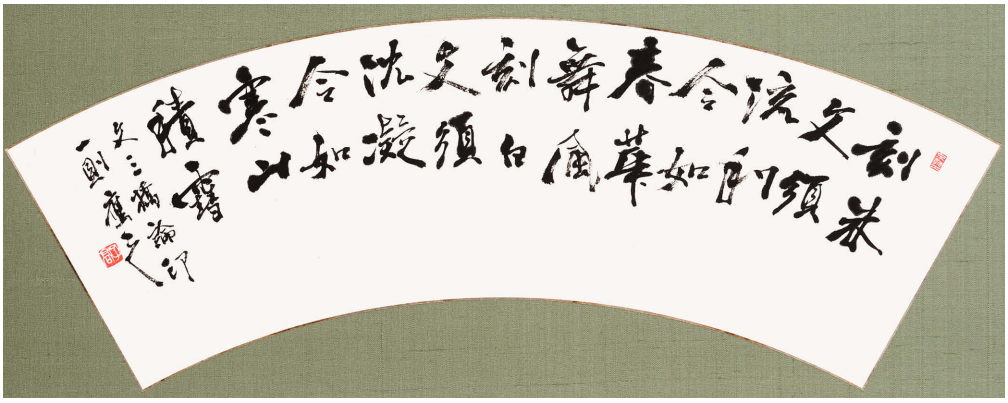
墨…墨運堂製「杉影」

紙…羅紋箋染め紙（藤色）

印…「子高」四分角白文 自刻

「不求工」六分半通白文 自刻

印泥…北京榮寶齋製「精制上品貢砂印泥」



22.5×60.0㎝

刻朱文須流利令如春華舞風、
刻白文須沈凝令如寒山積雪。
文三橋論印一則。鷹之。